

二〇年代初期に於いては、レーニンをはじめとして農民の創意による農村の工業化が目論まれていた。しかし、二〇年末には農村余剩労働力の吸収という観点から党綱領に唱われている農村工業の「高度な機械制工業への移行」の方針は否定され、農村は國営工業の支部となった。第一次五年計画では「農村内市場流通を都市・農村間取引への編成替え」が企てられ、この方針は三〇年代末に法制化される（三九八、四〇八頁）。このように社会主義の下で解消されるはずであった都市と農村の対立（これに関して第五章で、特にネオ・ナロードニキ系の経済学者の理念が検討されている）は固定化されたまま、農村は国家＝都市の農産物調達に従属せしめられるのである。

上述の政策＝実践過程が本書の経糸とすれば、ルイコフ等の最高国民経済会議を中心とするマルクス主義系経済学者とチャヤーンフ、オガノフスキー等のネオ・ナロードニキ系の経済学者の農村工業理論の検討とは私の能力を遙かに超えていることなので割愛せざるを得ない。更に、行間に横溢する著者のソヴェト史観（例えば下部機関の行き過ぎを後に中央権力が事後承認する政策ベターン、二〇年代末に見られる反対派批判の形態変化等）をここで一つ一つ開陳する余裕もない。是非、本書を参照してもらいたい。

予めお断りした通り、随分恣意的な「紹介」になってしまった。私としてはそれによって本書の価値が些かも損われんことを望むだけである。

（A5判 五〇八頁 一九七九年二月
東京大学出版会 五八〇〇円）
（堀川伸一 京都大学大学院生）

原口正三著

『須恵器』

（日本の原始美術 4）

須恵器を製作する技術は、古墳時代に日本へ伝わったが、その後、長く日本の食生活に定着し、重要な役割を果たした。本書は、五世紀から八世紀までの須恵器をとりあげ、その変遷を示し、生産・用法から須恵器の実像を描くものである。その内容は、著者の長年にわたる調査と研究に基づくものであり、その意図を誤って伝えることをおそれるが、本文「今來の器」の構成を示し、その概略を紹介することにする。

東アジアの中の須恵器
須恵器の系譜
陶邑の話
須恵器生産の拡大——地方窯の成立——
須恵器の生産——窯——
須恵器の製作
須恵器の形と名称
かわった形の器
ムラの中の須恵器
墓の中の須恵器
須恵器と土師器
須恵器の地方色
須恵器の工人
須恵器の末流
東アジアの中の須恵器、では中国の灰陶、「原始瓷」（灰釉陶）、「古越磁」をあげ、中国では古くから、酸化焰焼成技術、還元焰焼成技術、施釉技術へと進んでいたことを示す。そしてその直接・間接の影響が朝鮮半島に及んだ結果、五世紀中頃には高句麗で黄釉の陶器を製作し、南韓や倭でもようやく硬質の灰陶系技法を自らのものにしたところがあったとする。

須惠器の系譜、ではさらに一步進めて、最古の須惠器がどのようなものであるか、それは搬入品か日本で製作したものでか、日本での製作は一元的に始まったのか、多元的であったのかという点を問題とする。そして日本出土の最古の須惠器が朝鮮半島南部のものと共通点をもち、筒形器台や高杯形器台の存在から直接的な系累を伽耶地方に求めうとする。次いで、日本で最も古く須惠器生産を開始したと目される大阪府南部の陶邑古窯址群をとりあげ、窯の分布の変遷を概観する。

須惠器生産の拡大、では三つの画期によって須惠器をほぼ五・六・七・八世紀の四期に分け、その間の変化を明らかにする。すなわち第一の画期に第一次地方窯が成立し、第二の画期には器種に顕著な変化を生ずる。そして第三の画期には第二次地方窯が成立し、それは律令制の枠組みの中に成立した異質な地方窯であるとする。またそのほかに、須惠器産地からの距離と須惠器浸透度の相関関係、陶邑工人の地方への移動および古墳の被葬者との関係、供献する須惠器の需要、量産化と仕上げの省略、廃絶、等について多くの指摘を行なっている。

須惠器の生産、では須惠器を焼成した窯の構造を問題とし、五・六世紀の長期間焼成を行なうもの、七世紀の長い煙出しをもち床面の傾斜がゆるやかで容易に新窯を築けるもの、八世紀の火の引きを強くした小規模な窯および床面が水平で奥室をそなえた窯の三段階にわけうることを示す。

須惠器の製作、では成形法と仕上げと焼成について詳細に復原する。

須惠器の形と名称、では、現在用いられている名称と、文献にみえる名称とを検討し、機能・用途にもとづいて分類する必要があることを指摘する。

かわった形の器、では二重礎、角杯形瓶、皮袋形瓶、鳥形瓶、等の特異な須惠器をとりあげ、葬礼・祭祀の供献具として重視する。

ムラの中の須惠器、では遺跡の中で須惠器のあり方から、須惠器の供給と分配の変遷を考察し、政治的關係や階層的隔差の中に位置づけうることを示す。他方、墓の中の須惠器、には古くは集落で使われるものと同じものを用い、次いで供献用の特殊な器が現われること、そしてそれが被葬者の社会的地位の一端を語るものであること

を指摘する。

須惠器と土師器、では須惠器の出現が土師器に与えた影響を考察する。すなわち、土師器は大型貯蔵容器が衰退し、かまど・釜・甌のセットが煮炊き具として重要となる。また七世紀には土師器に皿・盤が現れ、以後長く須惠器と土師器とを併用することを示す。

須惠器の地方色、ではフラスコ形瓶、鳥形瓶、三足壺等の地域的特色をもつものを取りあげ、地域色の研究と自然科学的方法による産地同定とあわせることによって歴史の動態をこまかく把むことができる。

須惠器の工人、では須惠器生産は、固有な技術を發揮し、維持するためには組織的生産形態が初めから必要であったとし、その工人たちは当初から倭政権の生産体制に繰り込まれていたとする。そしてその後もしばしば新技術をもった陶工が渡来し技術革新をもたらししたことを示す。

須惠器の末流、では須惠器の終焉に地域差があることを指摘する。特に畿外のいくつかの地域では、中世陶器生産の母胎となり、その一部は現代にまで続くことを示す。

以上のように本文解説は多方面にわたっているが、それは須恵器の実像を描くことを意図したことによるものであろう。須恵器は編年を軸にして研究が大変、進んでいる分野である。また生産址や消費址（古墳・集落）の資料も膨大な量に達している。このような研究史と資料を踏まえて上梓された本書は、須恵器研究を専門とする者にとっても、門外の者にとっても大いに有益なものとなるう。

（A四判 七七頁 一九七九年七月
講談社 一八〇〇円）
宇都宮隆夫 京都大学助手

ジャケッタ・ホークス著

小西正捷・近藤英夫 共訳
河野真知郎・白土則子

『古代文明史』 1

原書は、J・H・プラム監修、シリーズ『人類社会史』中の一巻、Jacquetta Hawkes, The First Great Civilizations, Hutchinson & Co., London, 1973. 両河・ナイル・インダス三河川流域文明の一般向け歴史概説書である。著者ジャケッタ・ホークスは、英国政府・ユネスコ等の文化財

行政官、英国考古学振興会副総裁、ワシントン大学客員教授等を務めた考古学者であり、サンデー・タイムズ等の通信員でもある。

J・H・プラムの序に拠ると——歴史に於ける「進歩」の法則が揺らいで以後、専門家は専門分野の微視的分析を事とするのが一般となり、その結果として、専門的知識と大衆を対象とした歴史とのギャップは広がる一方となった。そこで、あえて、専門家による通史的な歴史叙述をもって現状のギャップを埋めよう——という意図をもって、シリーズ『人類社会史』は編纂されたようである。

原書は、三河川文明の興起と都市生活の生成過程、両河流域に於ける諸王朝の興亡とその社会、インダス文明史、ナイル流域の王朝歴史と社会、を七部構成で叙述しているが、本書はその前半四部、両河流域の文明史までを翻訳したものである。

一・二部では、文明の指標に関する二つの見解を考察した後、基礎作業として氣候・地理条件を述べ、ついで各文明の始まりから都市生活への行程を辿る中で、その文明としてのアイデンティティを提示して

いる。

三・四部は両河流域個別篇で、まず第三部で初期王朝期からアッシリア帝国崩壊に至る政治史を述べて枠組とした後、第四部で具体的に社会状況——衣食住から諸制度、宗教、美術等諸般——を横断面で把えて詳述している。第四部は本書の最も力点を置くところである。

以上が本書の簡単なアウトラインであるが、本書の何よりも特色は、今日までに専門家によって分析・実証された様々の局部的研究成果を実に多く駆使し、評釈を加えながら整合してストーリー・テリングしている点にある。創見の見られない恨みはあるが、概説書という性格上、又歴史学専門家ではない著者にとつて、それは、望蜀というべきかもしれない。細かな点では多少疑問の箇所が無い訳ではないが、管見の及ぶ限りでは大きな誤認はなく、一般向け概説書としてゆき届いた作である。読者は本書を読む事により、たくまずして専門家の研究成果を手軽に知る事が出来よう。この事こそ、このシリーズ編纂の意図だったのであり、その限りに於て、本書は首尾一貫した意義有るものである。